SAMA-ZAMA な関わりの中で生まれる学び

国際交流基金マニラ日本文化センター
音石　達朗、横堀　ひかる

「Thank you po(ありがとうございます)」「Wait lang po（ちょっと待ってください)」。私たちが派遣されている国際交流基金マニラ日本文化センター[1]（以下、JFM）のオフィスでは、タグリッシュという、タガログ語（マニラのあるルソン島で主に話されている言語）と英語（公用語の一つ）が混ざり合ったことばが日常的に行き交います。7,000 以上の島からなるフィリピンには、100 以上の言語が存在すると言われていますが、それらが混ざり合い、多様で豊かな言語環境・価値観がつくり出されているように感じます。

このような多様な言語環境が「普通」として受け入れられているフィリピン・マニラで、私たち日本語指導助手（以下、指導助手）も、多様な学びの在り方に触れてきました。今回は、その中から、にほんご人サポートチーム（以下、NS チーム）の「小噺ワークショップ」、いろどりチームの「対面いろどりマラソン（以下、対面マラソン)」に特に焦点を当て、音石、横堀それぞれが、そこでの経験や学びを改めて振り返ります。

ここではいつも多様な方々との関わり中での SAMA-ZAMA な（フィリピン語の 「sama-sama（いっしょに)」と日本語の「様々」を合わせたことばあそび）学びが生まれています。

NS チーム（音石）

フィリピンで広がる小噺の輪【おしゃべりサロン「小噺ワークショップ」】

みなさんは「小噺」をご存知でしょうか。小噺とは、日本の伝統芸能である落語における短い笑い話です。アメリカでは以前からこの小噺を言語教育と融合させながら文化理解と言語習得に応用する取り組み（みんなの小噺プロジェクト）が行われてきましたが、近年その活動がヨーロッパやアジアなど世界各地にも広がりをみせています。（世界の小噺に関する活動については下にいくつかご紹介しておりますので是非ご参照ください。）2025 年度、JFM でも、外部機関や大学と連携し、小噺に関するイベントを多数実施しました。その中から今回は 2026 年 1 月に実施したおしゃべりサロン「小噺ワークショップ」についてご報告します。おしゃべりサロンは、フィリピンの「にほんご人」[2]の出会いや交流を促進するイベントです。私自身は 2024 年 9 月のフィリピン赴任直後、JFM 主催の「教師のためのオンライン小噺ワークショップ」に参加する機会があり、そこで小噺と初めて出会いました。

[1] JFM の公式ニュースレターの最新版はこちらからご覧いただけます。
[2] にほんご人：国際社会において日本語を使って何かを達成したいという意思を持ち、そのために日本語でコミュニケーションをする人々の総称。（参考：にほんご人フォーラム｜国際交流基金日本語国際センター）

おしゃべりサロン「小噺ワークショップ」（2026 年 1 月）

その後、にほんごフィエスタのフィリピン小噺祭り[3]の運営やその他各地の小噺関連プロジェクトに参加することを通じて、小噺の基礎および日本語教育への応用について理解を深めてきました。これらの経験を踏まえ、本ワークショップを主担当として企画・実施しました。

当日のワークショップでは、まず経験者による小噺実演を観察して小噺の基礎を学び、参加者同士で気づきを共有しながら理解を深めました。基本動作や表現技法については楽しいクイズ形式で学習し、グループに分かれて練習を行いました。練習後には発表会を実施し、参加者はそれぞれの表現で成果を披露しました。

本ワークショップの特徴の一つは、参加者が自分の第一言語ではなく学習言語で小噺に取り組む点にあります。フィリピン人参加者は日本語で、日本人参加者はフィリピン現地語で小噺を練習します。この形式により、練習の過程そのものが相互学習の場となり、参加者同士が教え合い、学び合う環境が自然に生まれます。例えば、発音や言い回しについて互いに助言し合う双方向的な学びのやり取りの場面が多く見られました。母語や学習歴、レベルに関わらず、参加者が対等な立場で取り組める点は、この活動の大きな利点です。

[3] フィリピン小噺祭り：フィリピンのマニラで毎年 2 月に開催され、2026 年で 20 周年を迎えた JFM 主催の日本語と日本文化の祭典「にほんごフィエスタ」の中の一企画で、Association of Nihongo Teachers in the Visayas(ANT-V)との共同で実施されている。（参考：The 2nd Philippine Kobanashi Festival｜Nihongo Fiesta 2025）

小噺の練習の様子：高校生、大学生、教師、社会人、日本語パートナーズなど、年齢や国籍、立場問わず幅広い人が参加してそれぞれの経験や知識を共有しながら楽しく交流を深めました。

私自身もこの経験を通じて、参加者一人ひとりがリソースパーソンとして関わり、対等な関係の中で学びあい、教えあう環境をつくることが相互理解の促進につながるのだと実感し、多くの気づきを得ました。つまり、その分野に特化した専門的な知識や技術を持つ指導者がいなくても、参加者同士がそれぞれの経験や視点を持ち寄りながら学び合うことで文化理解は十分に深められるということです。また、文化との向き合い方についても、一方の文化や言語を単に教えこもうとするのではなく、異なる文化が相互に関わり合いながら協働し、その過程で新たな意味や価値を共に創出していくという視点の重要性を学びました。これまで私は、文化紹介の活動を一方向的に「教える」「経験してもらう」ものと捉えていましたが、対等な関係の中で「いっしょに学ぶ」という考え方に大きな価値を見いだすようになり、自分の教育観の広がりを感じました。これは日本語教育の現場のみならず社会全体に通ずることだと思います。また、企画立案および当日の進行にあたっては試行錯誤の連続でしたが、周囲の協力や助言を得ながら形にすることができました。そして、チームとして取り組むことの重要性と、協働によって企画を実現する大切さを学ぶことができ、今後に向けた貴重な経験となりました。残りの指導助手としての任期も残りあとわずかですが、これからも一日一日を大切にしながら日々業務に取り組んでいきたいです。

関連リンク

みんなの小噺プロジェクト：
https://one-taste.org/kobanashi/collectionKOBANASHI Competition
JLfest：
https://www.jlfest.my/kobanashi-competition
国際小噺合同発表会：
https://sites.google.com/view/kobanashifestival/%E8%B3%87%E6%96%99%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%AFresources-links
第 2 回フィリピン小噺祭：
https://www.youtube.com/watch?v=Oe7pZEHyFpg&t=8s

いろどりチーム（横堀）

学び続けるフィリピンの日本語教師のみなさんと共に

＜繋いできた学びの場「いろどりマラソン」＞

私は、いろどりチーム所属の指導助手として、『いろどり　生活の日本語』（以下、『いろどり』）を用いたさまざまな教師研修に携わってきました。中でも、月 1 回程度、オンラインで開催している「いろどりマラソン」[4]は、専門家や生活コーディネーターの方々から引き継いだ大切な活動です。2022 年に開始されて以来、内容や形式を少しずつ変化させながら、2026 年 4 月現在までに延べ 62 回のいろどりマラソンが実施されました。いろどりマラソンは、［体験］⇒［気づき］⇒［理解］という 3 つのパートで構成され、フィリピンの日本語教師のみなさんと共に『いろどり』への理解を深める場となっています。これまでは毎回、同じ活動 Can-do に基づき、［理解］パートでも毎回同じキーポイントを繰り返し強調してきましたが、2025 年度からは、毎回異なるテーマ・Can-do を設定し、そのテーマを軸に理解パートで紹介する内容（キーポイント）も変えるようにしています。よりさまざまな視点から『いろどり』への理解を深められる場にするための工夫です。

2025 年度いろどりマラソンテーマ一覧

[4] 安宅専門家（2026 年 3 月まで JFM のいろどりチームに所属）の寄稿で詳しく紹介されています。国際交流基金 - 日本語教育レポート いろどりマラソン―共に学び、走り続けるフィリピンの日本語教師たち

＜対面いろどりマラソンを通した気づき＞

オンラインでのいろどりマラソンに加え、対面形式の「対面マラソン」も年に 2 回開催しています。対面マラソンは、企画から当日の運営まで、指導助手が中心となって携わることのできる事業の一つです。私はこれまで、3 回の対面マラソンに関わりましたが、以降、特に気づきの多かった、１回目の対面マラソン（2025 年 2 月開催）について、改めて振り返ってみたいと思います。

1 回目の対面マラソンでは、『いろどり』授業における漢字の学び方をテーマとしました。教師研修等で出会った先生方から、「『いろどり』の漢字は難しい」といった漢字学習に対する不安の声を度々聞くことがあったからです。そのような不安の背景には、「教科書にある漢字はすべて読めて、書けなければならない」という教師自身の漢字学習観と、生活のための日本語学習を前提とする『いろどり』との間のギャップが影響していると思われました。そこで、［振り返り：教師自身の漢字学習経験・これまでの漢字の授業経験］⇒［理解：生活のための日本語における漢字学習の在り方を考える］⇒［実践：『いろどり』を使った漢字授業のマテリアルを作成・共有］という構成で活動をデザインすることにしました。当日、ある参加者の漢字学習についての疑問に対し、他の参加者が自身の経験を語り、そのやり取りの中から方略を見つけ出すような場面も見られ、参加者同士が学び合う様子もうかがうことができました。

活動後のアンケートで、［理解］パートについて「内容が複雑すぎて混乱した」等の声も聞かれ、個人的に課題も多く残る回となりましたが、一方で、「漢字学習に対する考え方が変わった」等のコメントもあり、活動の出発点であった参加者の漢字学習観に揺さぶりをかけることができたという点では、良い時間になったのではないかと思っています。

3 回目の対面いろどりマラソン（2026 年 2 月開催）の様子

この経験は、指導助手の私にとって、研修運営という点からも大変学びの多いものとなりました。その一つに、研修実施までに必要なタスクや流れを具体的にイメージできるようになったことがあります。それまで、教師研修等に部分的に参加していただけでは見えていなかった専門家が担っているタスクが、具体的に見えるようになりました。そして、対面マラソンの企画を経験したことで、研修全体の構成やそれぞれのパートの役割を意識するようにもなり、対面マラソン以外の研修でも、全体の流れの中での自分の役割を俯瞰して捉えることができるようになりました。指導助手、専門家、そしてチームの業務への理解がより一層深まった経験となりました。

＜学び続けるフィリピンの日本語教師のみなさんと共に＞

「学び」を単に知識の蓄積と捉えるのではなく、アイデンティティの変化等を伴う全人的な変容の過程と捉える学習観がありますが、指導助手の役割の一つは、教師のみなさんの変化のきっかけづくりを支えることだったのではないかと思います。ただ、このレポートを書きながら、約 2 年間の指導助手生活を振り返ってみると、変化していたのは私自身でもあったということを改めて実感しています。専門家の方々や、フィリピン人の同僚、そして『いろどり』を通して出会った現地の教師の方々との関りの中で、私自身もまた、変化する機会をいただいていたのです。

任期も残りわずかとなりましたが、この関りの中で、今私にできることを考え、新たに「いろどりカフェ」という学びの場をオープンしました（2026 年 4 月より）。いろどりマラソンが『いろどり』の体験を通した、理解を深める場であるのに対し、「いろどりカフェ」は、『いろどり』を使っている先生方がつながり、課題を共有し、対話の中から共にその課題を解決していけるような場にしていきたいと考えています。

「いろどりマラソン」や「いろどりカフェ」などの学びの場を通して、学び続けるフィリピンの日本語教師のみなさまと共に、最後まで変化という学びを楽しみたいと思います。

以上